



日本プライマリ・ケア連合学会  
近畿ブロック支部



発行人：鈴木 富雄

事務局 〒550-0001 大阪府大阪市西区土佐堀1-4-8  
日栄ビル703A あゆみコーポレーション内

Tel.06-6441-4918 Fax.06-6441-2055

Email [jpca@a-youme.jp](mailto:jpca@a-youme.jp)

HP <http://www.primary-care.or.jp/primarycare-kinki/index.html>

ニュースレター No.47 (2025.3)

## 特集：第17回近畿家庭医療・総合診療専攻医ポートフォリオ発表会（P-FES 2025）開催のご報告

P-FES 2025 実行委員長 大庭まり子（京都家庭医療学センター・京都民医連あすかい病院／京都市）



2025年3月25日、大阪医科大学にてP-FES 2025が開催されました。今回は5年ぶりの現地開催で、大会場をZoomでつなぐ一部ハイブリッド開催を試みたところ、Zoom視聴者20数名を含む100名を超える方々にご参加いただくことができました。

事前に36名（多職種3名含む）の詳細事例報告の提出があり、当日は34名（指導医、多職種4名含む）の先生方に5会場に分かれて発表していただきました。どのポートフォリオも素晴らしい実践や指導医との振り返りやご自身の成長について述べられ、文献を踏まえた考察もわかりやすくまとめられており、近畿全体のポートフォリオ学習のレベルが向上していると感じました。

また、質疑応答では指導医だけでなく専攻医や多職種、また学生からも質問や感想が寄せられ、対面開催ならではの議論の広がりがあったことも印象的でした。

特別講演では岡山大学の香田将英先生にPF学習におけるAIの活用についてお話しいただき、具体的な活用方法から注意すべき点など、明日からの実践に直結する非常に貴重なお話を伺うことができました。

終了後の交流会兼ワークショップには多職種含む30名の方にお集まりいただき、今後どのようにして総合診療・家庭医療を深めていくかなど話題は尽きず、明日からの具体的なつながりもあちらこちらに誕生したようでした。

今後も、ポートフォリオを軸とした専攻医教育が近畿でさらに発展していくことを願っています。





## 大学総診だより “第1回 奈良県立医科大学総合医療学教室”

吉本清巳（奈良県立医科大学総合医療学教室/奈良県橿原市）

奈良県立医科大学総合医療学講座は平成11年に開設され、初代中野博教授が就任、平成12年に中村忍教授が継承し、平成21年に退任されました。その後、平成23年に西尾健治先生が准教授として着任、平成25年に教授に昇任し、令和5年に退任、令和6年からは吉本が教授を務めています。西尾教授のもとで教室は大きく発展しました。

平成24年に病棟を再開し、平成25年には日本プライマリ・ケア連合学会の家庭医療後期研修プログラムおよび平日内科ER診療を開始、二次救急の受け入れも拡大しました。患者さんの話に耳を傾け、身体所見と病態生理を重視する診療を心掛け、患者さんの納得を大切に「力強く患者さんに寄り添う医療」をモットーに、全人的かつ医学的に信頼される医療を目指して診療を続けてきました。病床数も増加し、全国でも少ない大学病院で外来・入院診療の両方を担う総合診療科として成長しました。診断や治療が困難な症例が地域や院内から多く紹介され、幅広い医療ニーズに対応しています。現在は16床の病棟を運営しており、奈良県の最後の砦として診療しています。奈良県の医療状況から周囲に大病院が少なく、重症からcommonな疾患まで大学病院で幅広く経験することができます。平成28年には西尾教授が中心となり、奈良県の救急不応需率改善を目指して病院全体で土日ER診療を開始。これにより県内の不応需率は大幅に改善し、当科も多くのER診療を担当しています。また、地域中核病院である宇陀市立病院に多くのスタッフ、専攻医を派遣しており、日本で唯一の移動診療車にスタッフが設計段階から関わり、現在総合診療科で運用しています。宇陀市立病院では在宅医療も多く担っており、地域に根差した総合診療の実践に力を注いでいます。

国保明日香村診療所、奈良市都祁診療所で専攻医が研修しており、宇陀市東里診療所、へいせいたかとりクリニック、国保曽爾村診療所（令和7年4月より）は当科派遣医師で運営し、専攻医も研修しています。大学病院での高度医療と地域医療の現場を行き来することで、多様な経験を積むことができます。

学生教育にも力を入れており、医学部のコア・カリキュラムで総合診療の重要性が高まる中、従来は選択科目だった臨床実習が令和6年から必修科目となり、臨床推論や全人的医療教育をさらに強化しています。

当科は従来の家庭医療後期研修を基盤に新専門医制度の「総合診療専門医」後期研修も開始し、多くの入局者と専門医を輩出しています。現在も総合診療専門医、新・家庭医療専門医の両方を取得可能なプログラムを運営しています。また、修了生が多くなり、内科のダブルボード取得、大学院進学、海外留学など、キャリアアップの幅も広がっています。

当科の後期研修では、大学病院で約2年間研修した後、地域の病院や診療所での研修へと進む4年プログラムとなっています。commonな疾患から最重症例まで幅広く総合診療を学び、一人ひとりの患者さんにじっくり向き合う診療姿勢を身につけることを重視しています。大学研修中も週に1回、地域の診療所や病院で外来診療を担当し、大学での高度医療と地域でのcommonな疾患管理をバランスよく学んでいます。また、勤務先によっては訪問診療も担当し、在宅医療の経験も積むことができます。

さらに、全身疾患であるリウマチ・膠原病の診療も担当し、整形外科と連携してリウマチセンターを運営しています。令和4年からは在宅医療支援センターも設立し、地域の在宅医療を支え、患者さんの生活に寄り添う全人的医療を実践しています。

研究活動も積極的に推進しており、臨床研究だけでなく、奈良医大全体が得意とする血栓止血分野の基礎研究など、幅広い分野での研究活動に取り組んでいます。

教育機関にある総合診療部門として、学生にとって身近で憧れとなる存在を目指し、高い意識を持って診療にあたっています。大学病院で総合診療医がロールモデルとして存在することは、総合診療を志す医学生の育成において重要な役割を果たすと考えています。また、総合診療科は他の診療科や地域医療機関と連携し、互い

に学び合いながら信頼される存在であり続けることを目指しています。このように、総合診療が大学内外で確固たる存在感を持つことで、地域医療・総合診療の発展と、将来の医療を担う人材の育成に寄与できると考えています。

さらに奈良県では、県が主導する総合診療プログラム協議会を通じて県内すべてのプログラムが連携し、研修会や交流を通じて総合診療同士のつながりが強いことも特徴です。

教育・臨床・研究の各分野で総合診療が果たす役割はますます重要となっています。今後も幅広い視点を持ち、「成長し続ける総合診療」を実践し、患者さん、院内、地域、全国から信頼される科として発展するとともに、地域医療の充実と総合診療領域のさらなる発展に貢献してまいります。

## 報告：ドクター体験プロジェクトについて

松島和樹（神戸総合診療・家庭医療専門医プログラム、川崎病院/神戸市）

いつもお世話になっております。神戸総合診療・家庭医療プログラムの松島です。今回は私が関わっているドクター体験プロジェクトのご紹介をさせていただきます。

プロジェクトのきっかけですが、もともと近畿ブロックの研修支援活動に医学生にも参加してもらっていました。その中で「医学生の実習先に、JPCAに所属しているプライマリ・ケア医が少ない」ことが課題として取り上げられたことをきっかけに、2022年夏にプロジェクトを開始しました。以降、2023年夏、2024年夏と実施しています。2025年には春休みにも募集をかけ、2月～4月の間に実施いただいているところです。

対象者は近畿圏内の医学部医学科1～4年生です。学年LINEなどで広報を行い、申し込みフォームに記入いただきます。場所や日程、見学したい内容などの項目が合う医療機関とマッチングを事務局が行い、実習に進んでいただいています。

これまでに延べ48名の学生さん達にご参加いただきました。2024年の学術大会では、スタッフとして参加してくれている学生たちが成果をまとめてポスター発表を行い、優秀賞を受賞しました。学会ホームページに記事が掲載されていますので、ぜひご覧いただければと思います。<https://www.primarycare-japan.com/news-detail.php?nid=1075>

このプロジェクトを始めて、総合診療専門医・家庭医療専門医を増やしていくにはもっともっと学会からアプローチを行い、接点を増やしていくことが大事だと、改めて感じています。医学教育改革の流れで、学部教育の中に患者中心の医療などの要素がかなり含まれるようにはなっていますが、実際にそれがどう発揮されているのかは直接見てみないと理解は難しいと思います。様々な機会を通じて、私達が楽しく臨床を行っている姿を学生・研修医に見せていく努力が必要だと考えています。

最後に、このプロジェクトが続けられているのは、近畿ブロックでお引き受けいただく皆様のご厚意の賜物です。時には連絡が不十分でご迷惑をおかけしたこともあります。参加する学生は決してプライマリ・ケア志向の方ばかりではありませんので、対応が難しかったこともあるかもしれません。それでも、参加いただいた学生達からは、参加してよかった、学びになった、という声をいただいています。本当にありがとうございます。今後とも宜しく願いいたします。





## 報告：「総合診療選択に対する期待と不安」お話し会 with 研修医

川島篤志（市立福知山市民病院/京都府福知山市）

昨年に引き続き、初期研修医の皆さんと「総合診療」について気軽にお話しできる場を提供したいと考え、「総合診療選択に対する期待と不安」とにかくしゃべりましょう」と題したイベントを3月9日【日曜】に開催しました。初期研修医1年目を主対象にしてアナウンスをさせていただきましたが、連絡の難しさを痛感しました。それでも今回は、1年目3人+既に総合診療に進路を決めた2年生2人が参加してくれました（昨年に引き続き参加してくれた先生もおられます：ありがとう！）。

今回は会場を趣のある会場から勝手のいい大阪医科薬科大学さんの医局に移動し、更に予定外ではありましたが、鈴木 富雄先生が総合診療のプログラムのことを含めたキャリアの概要説明を急遽やっていただきました。これで頭の整理もできたという感じで、2グループに分かれて、ワールドカフェ方式で和気あいあいとした雰囲気の中、お話しで盛り上がりました。中堅・ベテランの先生方が話を聴きつつアドバイスを膨らませていって下さったのもこの企画のいいところかなと思います。参加者の声として、「総合診療の“いいところ”をより深められた」とか「キャリアについてより考えることができた」という意見がありました。医学生さんにとっては、2025年度から始まる「かかりつけ医制度」のことは、まだあまり耳にはいっていないようで、これはキャリア変更を考えている中堅の先生にも早めに伝えてあげた方がイイ話題なのかなとも感じました。専門医制度関係の話はまだわかりにくい感じで、よりわかりやすく伝えることが大事なんだろうなあと再認識しました。JPCA会員の皆さまも医学生・初期研修医に制度についてのお話しを宜しくお願い致します。

さて、総合診療に対する不安や期待は、医学生や初期研修医の間で依然として高いものではないかと思えます。しばらく毎年春に、この会を継続して開催する予定です。次の会の参加主対象者は…。そう、2025年度に初期研修医になる先生方です。ぜひ早いタイミングから、「来年の春に一緒に行こうね！」と声掛けをしてもらえると嬉しいです。

昨年に引き続き当企画はJPCA近畿からの補助金をいただき実現することができました。改めて支援してくださった皆さまに感謝申し上げます。今後も、医学生や研修医が自身のキャリアに対する不安を少しでも解消し、安心して総合診療という選択肢を考えることができるよう、努力を続けていきます。次回の企画にもご期待ください。



## 活動報告：紀州が生んだ幕末の名医 内外科医 小山敬輔（小山肆成）の紹介

竹井 陽（白浜医療福祉財団 白浜はまゆう病院 国保直営川添診療所/和歌山県西牟婁郡白浜町）

今回和歌山が生んだプライマリ・ケア医の先駆けである幕末の名医小山敬輔を紹介することでプライマリ・ケア医の先輩の歴史を紹介できる機会になればと思い寄稿させていただきました。一般的には小山肆成と記載されますが、幕末の洛中名医の名簿平安人物志（現在の医師会名簿のようなものでしょうか）には内外科医・小山敬輔とあったということですから、おそらく生前はこの名前と呼ばれていたと考え、題名としております。

また彼は内科医として確立された医師でありながら、京都市中でたくさんの人を診るために内外科医と標榜していたことも、私は彼の人間性を感じ感銘を受けました。そして学術的には彼は天然痘ワクチンの国産化の立役者です。



白浜はまゆう病院前  
郷土の医聖 小山肆成 顕彰碑

ここからは「種痘医 小山肆成の生涯」という山本亮介先生の著書に沿って 自分の考えを交えながら記載をしていきたいと思えます。まず当時の世相から始めます。時は元治元年（1864年）口熊野（西牟婁一串本・古座川のこをこういいます）の古座浦で18歳の男子が高熱のあとに突然発疹が出たことから 事件が始まります。まず村の漢方医が診察し、水痘だろうと診断し、天然痘ではないということで一度は安堵したのですが、やはりその50年前に天然痘の流行を経験している家族は心配となり、蘭方医を招いて診断させたところ天然痘であるとの診断でした（後医は名医であったのかもしれませんが）。村役人への届け出は速やかに行われたとのことでした。そして那智山への隔離が

決定し、天然痘小屋といわれる場所に古座の港から宇久井浦まで船で搬送し、隔離したそうです。もちろん差し入れはあるものの（差し入

れするのは罹患者の生き残りと決まっていたそうです経験的に人々は免疫を知っていたということです。また流行初期は差し入れする人間さえいなかったのかもしれませんが。）、事実上、大半は死亡する隔離であったそうです。そして葬儀も家族葬で営むのですが、これも厳戒体制のもとで行われたということです。また流行が始まれば貧者に限ってばたばたと天然痘に倒れ、治療は隔離しかなかったというコロナ禍初期を彷彿とさせる状況が描かれていました。また受診と届け出を迅速に行ったにも関わらず、感染の発端となった一族郎党は郷里追放（賠償金で最終的には解決になったそうですが）、早急な処置を講じなかった村役人は解任、時の紀州藩行政から流行期間中の患者と遺族への見舞金と御救米（救済金）がなされたという苛烈な状況と行政の対応もコロナ禍初期に重なる部分はないでしょうか。

では小山敬輔の話に戻りますが、彼の先祖は不思議な縁ですが、現在 私の母校のある自治医科大学の最寄りの街栃木県小山市に由来しているそうです。そして寛政6年（1794年）、現在の和歌山県白浜町久木という日置川の上流で彼は生まれました。敬輔は13歳のころ当時医会の権威の頂点にあった神医・華岡青洲（日本で初めて世界に先駆けて全身麻酔を成功させた医聖です）を目指して上洛したいと既に京都で医師となっている兄に手紙するも、しばし待てと言われ、代わりに断毒論（文化7年（1811年）刊）という文献を渡されたとのこと。断毒論には漢方では天然痘は遺伝+環境にて発症と書いているが、間違いなく伝染病であると断じており、隔離することが現在の唯一の方法であると書かれていました、それ（天然痘は伝染病であるという説）はその時点では異端の教えであったそうですが、実際に天然痘の流行を目の当たりにしている敬輔にとってはその説は真実であると確信したでしょう。

そして世界に目を移してイギリスでの種痘法の発明についてですが、エドワード・ジェンナー（1749-1823）はイギリスで牛痘に感染したことのある乳搾りの婦人は天然痘に感染しないという俗信から、乳搾りの婦人の腕にできた牛痘を8歳男児に接種し、天然痘に感染しないことを確認し、それを繰り返して“牛痘の原因と効能に関する研究”という論文を発表しました。皮肉なことに本国のイギリスでは批判の嵐でしたが、イギリス以外の国々で賞賛され、ジェンナーは牛痘の普及につとめ、1803年イギリスにて種痘法が設立され、イギリスの一般大衆がワクチンを受けられるようになると、イギリスでの天然痘は激減しました。またこの研究は後のパスツールの研究、ひいては北里柴三郎のジフテリアに対するワクチン開発にまで繋がっています。

しかし当時のワクチンは牛痘感染者の痂皮を保存し、接種する方式で、船でそのワクチンを運ぶには保存法がありませんでした。シーボルトが日本にもってきたワクチンは完全にその効能を失っていたそうです。当時日

本でも 天然痘から生還した人は二度とならないという経験則から天然痘の分泌物を子供に接種する人痘法が行われましたが、健全な小児が次々と天然痘に罹患し死亡するという惨禍を招いていました。

小山敬輔はイギリスから上海に伝わっていたジェンナーの論文を解説する成書に基づいて、みずから引痘新法全書という訳本を発売しました。しかし、ワクチン製作の過程で、人間の天然痘を牛に接種するも、牛は牛痘にはかからないというジレンマに苦しんでいたそうです。天然痘は人畜共通ではないですから、これは当然だと思います。そこで敬輔は牛市に足を運び牛痘に罹患している牛を徹底的に探しました。莫大な牛の購入に彼は私財の大半を投じたそうです。そして、成書どおり針でその分泌液をとり、華岡青洲と同じく、まず自分の妻に接種したそうです。しばらくして 発疹はあらわれるも、軽症で終わり、その経過が成書と全く同じであることから、妻に免疫ができたと確信した敬輔はその妻の痂皮を溶かしたものを6歳の男児に針で接種し、感作したこと（ある程度の発熱・発疹）を確認し、成功を宣言したそうです。そのことが、知れ渡ると次々と小児の天然痘予防に人々が京都市内の敬輔の医院（東洞院蛸薬師；洗我室東風館）に押し寄せ、京都でのワクチンの最初の大規模接種にいたったそうです。さらに敬輔は多忙な身に鞭打ちながら、京都から故郷の和歌山県にも赴き故郷の子供たちにワクチン接種を14日間集中して出張接種もしたそうです。

その後 1849年（嘉永2年）はじめてオランダ経由でも有効なワクチンが伝わり、幕府は大阪に緒方洪庵をリーダーとして除痘館を設立し、その後江戸にも除痘館が設立され東京大学の前身となりました。そして明治政府は明治3年（1870年）太政官布告をもって天然痘ワクチンを奨励し、明治9年天然痘予防規則から定期接種制度を発足させました。そして大正時代には大規模流行はほぼ日本からなくなり あばた（天然痘の痕）もえくぼのあばたは過去の遺物となりました。そして私が生誕した1980年5月にWHOは天然痘の根絶宣言をしています。私は人類が始まって以来、初めての天然痘なき世界の1号生です。

天然痘ワクチンにかけた人類の努力が忘れられかけていた頃、私たちはCOVID-19との闘いを経験しました。今後このようなことは必ず繰り返されると予想されます。先人達のプライマリ・ケア精神に学び、私たちはもう一度新興感染症に対する防波堤を築く必要があるのではないのでしょうか。そのためには行政・学会・医師会・大学病院・私たちのような市中病院・診療所がOne Teamとなってもう一度結束する必要があることを述べ、この寄稿の結語としたいと思います。

## お知らせ：近畿ブロックStart-UP meeting 2025のご案内

松島和樹（神戸総合診療・家庭医療専門医プログラム, 川崎病院/神戸市）

毎年恒例の、日本プライマリ・ケア連合学会近畿ブロックの新専攻医オリエンテーションですが、今年度は趣向を変え、全専攻医・初期研修医・学生を対象に開催いたします。参加費無料！

明日から使える学びと、タテとヨコのつながりを提供したいと思っていますので、ぜひぜひご参加ください！

※各プログラム責任者は、なるべく多くの専攻医が参加できるよう、業務調整をお願いします。

※参加いただける指導医の皆様にはワークショップのお手伝いをお願いするかもしれません。

申し込みはPeatixで行います。こちらのリンクよりご登録をお願いします！

<https://startup2025.peatix.com/view>





<日時> 2025年5月24日 (土) 13:30~16:30

終了後、懇親会を近隣の会場で行います。(懇親会費は別途徴収)

<場所> グランフロント大阪 北館 Tower C ナレッジキャピタル  
カンファレンスルーム C05, 06, 07

<タイムテーブル>

13:15~13:30 受付  
13:30~14:00 開会挨拶、総合診療について(鈴木富雄先生)  
14:00~16:00 新専攻医:オリエンテーション&交流企画  
専攻医2年目以上:実践!ファシリテーション術  
初期研修医・学生:総合診療医の診察室を体感してみよう!

16:00~16:30 クロージング

終了後、懇親会

<託児について>

申し訳ありませんが、会場内には託児の準備はありません。近隣の託児施設をご利用ください。

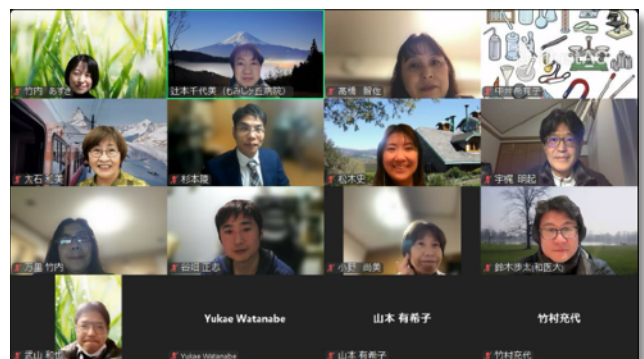


## お知らせ: JPCA近畿ブロック薬剤師ミーティング始動

鈴木 渉太 (和歌山県立医科大学薬学部 SCOP / 和歌山市)

2025年2月14日、薬剤師が集う新たな交流の場として「JPCA近畿ブロック薬剤師ミーティング」が立ち上がりました。記念すべき第1回目は、近畿ブロックの薬剤師代表でもある大石和美先生(有限会社丸山薬局/滋賀県東近江市)にご講演いただきました。大石先生は、昨年の日本プライマリ・ケア連合学会 年次学術大会のシンポジウム(2024年6月9日、浜松市)に登壇され、発表した「地域にかがやく!プライマリ・ケア認定薬剤師の活かし方」は非常に好評を博しました。年会は大規模で複数の企画が同時進行するため、関心はあったが聴講できなかったという声も多く寄せられており、今回はそれに応えるかたちで発表いただきました。

開催にあたり、メーリングリストだけでなく、薬剤師向けのFacebookページにも投稿し、オープン形式で広く参加を募りました。開催日時や告知方法も手探りでしたが、週末の21:00-22:30というスケジュールで開催したところ、約20名のメンバーが集まり、盛会となりました。前半は大石先生の講演、後半は参加者の自己紹介を兼ねた意見交換を行いました。同じ近畿で活動しながらも、認定薬剤師になって日が浅い方、コロナ禍で交流が途絶えていた方など、多様な立場の参加者が集まり、今後の方針についても活発な議論が交わされました。個人的には、一人薬剤師として誰にも頼れない状況で判断を迫られた経験や、家族の病気をきっかけに患者視点をより身近に感じた経験などが、想像力を育み、プライマリ・ケアで活躍する魅力的な薬剤師を生み出しているのではないかと新たな仮説が生まれた予感がしました。今後も隔月での定期開催を予定しています(他のイベントとの兼ね合いでスキップの可能性もあります)。今回参加できなかった方も、次回以降からの参加でも大歓迎です。近畿在住でなくても、薬剤師でなくても参加可能です。このミーティングを通じ、薬剤師のネットワークが広がることを期待しています。



次回開催予定: 2025年4月11日(金) 21:00-22:30

## その他

### ●近畿ブロックのレジェンドたちのライフヒストリー&感動秘話

#### #13 廣西昌也先生、梶本賀義先生 第37回近畿地方会 in 和歌山

第37回JPCA近畿地方会が2024.11.17、和歌山城ホールで開催されました。大会長を務められた廣西昌也先生、実行委員長を務められた梶本賀義先生にお越しいただき、学術大会の振り返り、こっそり裏話など、ユーモア交えてお話いただきました。アットホームで、学びのある学術大会の雰囲気再現!?されています。どうぞお楽しみ下さい♪

# 1 石丸裕康先生

# 2 木戸友幸先生

# 3 中山（畔田）明子先生

# 4 雨森正記先生

# 5 鈴木富雄先生

# 6 松井善典先生

# 7 竹中裕昭先生

# 8 三澤美和先生

# 9 専門研修をはじめたばかりの3人の専攻医

# 10 吉本清巳先生、および第35回近畿地方会の実行委員会のみなさま

# 11 大島民旗先生、川島篤志先生、稲岡雄太先生（第36回近畿地方会大会長他）

# 12 武田以知郎先生



<https://podcasts.apple.com/gb/podcast/legend-of-gp-in-kpca/id1583573369>

## ニュースレター編集委員大募集！！

朝倉 健太郎（大福診療所／桜井市）

近畿ブロック ニュースレター編集部では、近畿ブロック支部や各府県支部の取り組み、会員のみなさまの近況などを中心に編集作業に取り組んできました。3ヶ月毎、年4回の発行を行っており、本誌2023年春号は43号にあたります。引き続き、様々な立場、役割を担っている会員のみなさまの活動を幅広く取り上げていくことができると考えております。ニュースレターの編集にご興味のある方、一緒に面白い記事を作成してみようかなと思った方は、編集部 kentaroasakura@gmail.com 朝倉 までご一報下さい。

【支部からのご連絡】 [ブロック支部活動について皆様からのご意見やご提案をお待ちしております！](#)

[近畿ブロック支部・各府県支部・公認グループ活動のホームページ](#)

<http://www.primary-care.or.jp/primarycare-kinki/> 是非、アクセスしてみてください。

（学会トップページ <http://www.primary-care.or.jp> 上部メニュー「講演会・支部活動」から）

ホームページ担当：梶原信之



## 編集後記

2025年はまさにミレニアムから四半世紀が過ぎようとしている節目の年です。当時、2000年問題が大きく取り沙汰されたことをうっすらと記憶していますが、時代を経た現在も、2025年問題、2035年、あるいは2050年問題と、その年代、その状況に応じた様々な社会問題に向き合わざるを得ない無力感に打ちひしがれるかもしれません。確かに、遅々として進まない領域もあるのですが、それなりに変わったと実感できる分野があるのも事実かもしれません。そして、何よりそこに居合わせた私自身も、随分と年を重ねたものだと、鏡に混じった銀髪に軽くため息をつきたくなるものです。

さて、今号も何とかニュースレター発行にこぎつけることができました。ご執筆いただきましたみなさま、この場を借りてお礼申し上げます。近畿ブロックで取り組まれている様々な活動に目を通すと、その幅の広さと熱心な思いが伝わってきます。ニュースレターで紹介しきれていない他の取り組みも多々あることと思います。引き続き、KPCAの幅広い活動、取り組みをアーカイブするニュースレターを目指していきたいと思えます。編集部では、双方向性の編集を目指すべく、今更ながらではありますが、2025.3月号より編集後記を設けることといたしました。どうぞ、よろしくお願いいたします。【A】

2025.3.17